

植物が教えてくれた時間と深み

河野 華子 千葉県茂原市 三十歳

私は、二十四歳の時に「造園」という世界に飛び込んだ。馴染みのなかったその世界を少し奇妙な目で見つめるとともに、魅了される何かを求めて日々を過ごしてきた。この月日の中で海外での生活も経験した。国境を越えても、植物という一つの対象と向き合うと「時間」や「時の流れ」に敏感にならずにはいられない。そんな日々の中で、生き物だからと心急いでも仕方ないこと、一でもなく二でもなく、黒でも白でもない、そんなモノの在りかたを時間とともに私は知っていった。緑を学んでいるはずが、時に「時間」やモノを見るための「まなざし」を学んでいるような気がしてくるのだ。日本の便利すぎる日常の中で生き、いつも最短ルートを検索し、最短の方法を選び、最速の機能を選ぶことは決断の時間もあたりのない程のあたりまえの選択である。けれど緑と向き合う時間は、その真反対なことが多い。時間が経ってわかることがあるということ。「待つ時間」が形のない豊かな心の動きを与えてくれるということ。言われてみれば当たり前のことのはずだが、植物は可視化して、なんとも深みのある世界を私たちに教えてくれる。

多様化するこれからの私たちの世界。

私はその世界をより美しく受けとめられるだろうか。

みどりを見るまなざしのように、時間を感じながらそこにある深い深い世界を見てみたい。